

## 第5回日本へき地 保健医療研究会に参加して

富山県立技術短期大学衛生工学科

長谷田 祐作  
(現 富山市民病院五福分院内科)

第5回日本へき地保健医療研究会（会長柳沢利喜雄）は昭和49年2月7日、8日の両日にわたり群馬県利根郡新治村の湖山荘において、群馬大学医学部公衆衛生学教室のお世話で開催された。北は北海道、南は九州に至る各県からの参加者は総数99名を数えた。

第1日は午後3時開会、同6時までシンポジウム、第2日は午前9時より一般演題発表午後1時より特別講演（上林茂暢先生 杉並組合病院）、続いてフリートーク、総会、終了は予定の3時30分を超える盛況であった。以下その概要について報告したい。

### 1 シンポジウム

内陸部へき地の保健医療の実態と対策—群馬県を中心として—をテーマとして行なわれたが、演題と演者は次の通りである。

- (1) 群馬県へき地医療実態調査を中心として 群馬県医務課長 佐藤 信
- (2) へき地診療の体験 同県利根郡昭和村久呂診療所長 花岡 功
- (3) へき地保健婦活動の実態 同県勢多郡黒保根村保健婦 東宮はる江
- (4) 農山村の母子保健活動を通じて 同県吾妻郡高山村母子センター助産婦 鈴木 マツ
- (5) 地域医師会の立場から 同県医師会へき地診療運営委員 矢野 亨

司会は日本医師会常任理事、重田精一氏の子定のところ変更となり開催地代表幹事、群馬大学医学部公衆衛生学教室の辻教授が担当

された。

まず佐藤氏はアンケートによる実態調査の集計として、医師の利用状況が86.2%と割合によく、主治医を有する者約60%であること、巡回診療の利用は13%であることなど受療の実態を明らかにし、問題点としては

1. 救急医療体制の整備
2. 平常時の医療体制
3. 医療施設、医療従事者の確保
4. その他道路の整備

などを指摘した。

花岡氏は昭和32年9月、当時国保直営診療所であった現在地へ着任、約10年で国保直営廃止、開業形式に変更となり現在に至った間の診療経験と日常生活を通じての感慨をまじえて所見を発表、現在最も痛感していることとして、

1. 極めて多忙であること
2. 町へ出れない、即ち勉強の機会が少ない。
3. 子供の教育が行き届かないこと

などを挙げた。

東宮氏は現任中の黒保根村の地理的状況に併せて人口（幼少人口、生産年齢人口、老人人口）の推移を述べ診療所はあるが常勤医師は転居欠員となっており、現在は午前半日のみ内科診察が行なわれていること、桐生保健所の指導による成人病対策の推移、母子に重点を置いた保健婦活動の概況などについて述べ、問題点として、

1. 村の中における問題
2. 診療所の問題
3. 保健所の問題
4. 老人医療の問題
5. 保健婦としての問題

などを挙げた。

鈴木氏は同様現任中の高山村について地理的状況に始まり医療施設などの状態、医師として中国の医師1名、台湾の歯科医1名が勤務中であること、助産婦としての日常勤務状況などユーモラスに実態を報告し、母子センターにおける取扱いの内容、入所基準などにふれた。

矢野氏は開業医の立場から医師会におけるへき地への協力体制を地域医療の方向から取上げ国、県、市町村、大学などの働きかけのあり方について意見を述べた。なかんづく医師の善意にも生理的立場から負担の限度が存することを強調した。

それぞれについて司会の辻教授より簡単な要約と助言がなされたが、大略次のようなものである。

現下における医療はへき地に限らずある種の危機に傾していること、医師については量の確保が必要でありバトンタッチの出来る体制が望ましいこと、へき地において特にriskの多いものとして老人と母子が挙げられること、母子センターなどでは適切な指導者が必要であること、医療における協力者の労を多とすべきことなどである。

へき地診療の経験の有する筆者にとっては花岡氏の痛感されている点については誠に同感に堪えない処であり、司会の辻教授より通勤医療の形態もあり得ることがアドバイスされたが、その場合救急体制はどうするか解決がなされない限り、現任者としては踏み切れないものがあることを察することができた。

中国や台湾などより医師が日本に招へいされていることはマスコミを通じて知っていたがこの群馬県内でその現実につづいて感

慨の新たなものを感じた。富山県内ではまだそうしたことはないようである。

矢野氏の発表ではへき地に対する各種医療施設などの働きかけについては横の連絡や組織化、検診データの保管についてデータバンクの設置などの要望が見られたが、こうした体制・施設の早急な整備は富山県にとっても必要なことと考えられる。

## 2 一般研究発表

16の演題と招待発表「愛育班活動による自主的健康管理」が行なわれたが、前者では「長崎県における離島医療の現況」が特異なケースとして参加者の注目をひいた。同県では離島へき地が多数散在し、その対策に腐心されていたが近年はこれらに対し巡回検診がなされていること、健康管理票や健康カードの利用、データ通信やデータバンクの利用が試みられ良好な成果が上っていること、そして救急医療にはヘリコプターの利用によって即時国立病院での診療が受けられることなど他県よりの参加者にとっては夢のような活動ぶりがスライドなどにより紹介された。

筆者の注意を惹いたものとして「へき地医療における demand と need の疎遠と変貌に関する若干の問題」(倉科他 自治医大)である。医療を商行為に対比させ、消費者側としての一般住民、供給者側としての行政官ならびに医療従事者の双方が医療の本質に対し重大な誤認を行なっていると指摘し、need と demand と如何ように合致させてゆくかを追求したものであるが、商行為と対比させるという危険性が強く印象に残り継承する研究に注意していきたい。

「へき地にある保健所の改革について」(西田 愛媛県久万保健所)はかつて公衆衛生 Vol. 35, No.9に投稿の同氏の構想を敷いたものであり、へき地にあつては保健所と公的病院とを同一敷地に、または隣接して建て、所長と院長とは同一人を併任させ保健所

と病院を一つの組織として運営することを提唱する。

これは予防・保健と治療とを一体化させようという趣旨と考えられ誠に理想と思われるが、検討すべき問題が余りに多く実現の可能性は極めて薄いと言えるのではないだろうか。

以上の他医療需要に関連する演題5、糖尿病調査1、肝疾患関係演題6、そして最後に予定されてあった「自治医科大学夏季実習2ヶ年の経験に鑑み、へき地問題の医学教育への取組み」(柳沢自治医大)は時間の都合でフリートーキングに回すこととされたが、同好の士の研究集会でもあり終始なごやかな中にも熱気あふれ、寒気厳しい上越の地も此処だけはそれを感じさせない位であった。

なお筆者は帰りの汽車時刻の関係で招待発表、特別講演共に聴取できなかったが前者は埼玉県秩父市浦山地区において昭和30年4月愛育班が結成されて今日に至るまでの活動経過と今後の計画など発表された由である。

特別講演の上林講師は昭和47年、毎日新聞懸賞論文「日本の選択」受賞者でありその内容は単行本として発行掲載されているので参考とされたい。

最後にこの研究集会をお世話された群馬大学医学部公衆衛生学教室からの研究会終了の挨拶状より一部を抜萃転記してこの報告をしめくくるとする。

このような集会のみでへき地の問題は簡単に解決できるものとは思いませんが、全国のこの分野に関心の深い方々が一堂に会して胸襟をひらくことは有意義であったと考えます。

大所高所の論議も勿論必要ですが、底辺層の素朴な意見もすてきすることは許されないとします。また、へき地といっても処変わればひとつも変わるのたとえの通り、自在に対処すべきアプローチがあるようです。

今後は開催場所を各地に移して事例研究的に着実なルートの開発が前提と思われます。

(終)